
終わりから始まるエデン

カルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりにから始まるエデン

【Nコード】

N1838T

【作者名】

カルマ

【あらすじ】

いきなり放り出させた世界。まわりにいる他人。そのすべてが理解できず、そして……憎かった

すべてから逃げ出せば、そこは異世界だった。ってな感じで初めての投稿小説です。しかも最初の設定だけ考えてあとはノープラン。どんなストーリーになり、どんな結末になるのかまったくわかりません。それでも読んでいただけたなら幸いです。

序章（前書き）

初の投稿小説です。誤字脱字や、見当違いの表現方法があれば教えてください。すぐに修正します。

序章

「おい、君。起きなさい」

「……………どこだ？ここは？」

年のころは二十歳前後。平均的な日本人特有の黒髪黒目。日本人の平均男性より少し低い身長。やや目つきは悪いが、二枚目の端っこにひっかかる程度には整った容姿。彼は眼を覚ますと眉間にしわを寄せ、起き上がりながら自分を起こした相手に尋ねた。

「やはり君もか。…………いや、私達もここがどこかわからんのだよ」

そう困惑気に男はつぶやく。見た目でいえば三十歳後半ぐらいの男の向こうに目を向けてみれば、確かに複数の人がいた。二十人前後だろうか。性別、年齢、服装でんではばらばらで統一性がない。強いて言えば、皆一様に困惑気ではあるが…………

「わからない？」

「ああ。ここにいる全員、いつここに来たのか。何故こんな場所にいるのかわからない」

そう言われ、この場所を見まわす。どこかの部屋なのだろうか、四方は壁に囲まれている。窓はなく、唯一つドアがあるだけの部屋。調度品も何一つない。二十人近い人数がいてもゆとりがあるぐらいの広さがある。

「しかも外に出て確認しようとしたが、唯一のドアも開かないとき

ている」

「……………」

そう言われ、おもむろに立ち上がりドアへと向かう。そして開けようと押したり引いたりしてみるのが、まったく開く気配がない。

「わかってもらえたかな？」

そう苦笑しながら話しかける。

「先ほどは男三人でおもいきり体当たりしてみたがびくともしなかつたよ」

それほど強固であるならば自分が加わっても意味はないだろう。そう思考すると、十夜は元の場所に戻り座り込んだ。

「私は、三浦。三浦義和という。三十八だ。会社を経営して『いた』。できれば君の名前も聞きたいのだが？」

「……………藤島、十夜」

「それじゃあ藤島君、私はこんな状況になった理由を知りたいと思っている。だからここに来る直前のみんなの行動を聞いているんだ」

「……………」

話す三浦を十夜は無表情で見る。いや、睨んでいる。

「もちろんプライバシーの問題もあるから言いたくないこともある

だろう。だからまず私が話すから、その後で君の事を聞きたい。もちろん私の話の後に、拒否しても構わない」

「……わかった」

三浦の言う条件を聞き、睨んでいた視線をいくぶん弱めて十夜は返答する。

「それじゃあ聞いてくれ。……私は自殺をしていた」

そついう三浦の表情に変化はない。ただ淡々としている。

「……俺もだ」

そつ答えた十夜。そこに表情はない。ただ淡々と言葉を紡いでいた。

第1章 終わり

『明星大学付属病院』

その病院の病室の一つに、藤島十夜 ふじしま とつや はいた。

「なぜ人は死ぬ?……死んだらどうなる?」

人という種が昔から疑問に感じ、しかし知ることのできない問題を十夜は呟いていた。疑問の言葉を紡いでいるが、この部屋に彼以外の人影はない。

「死ぬのになぜ生まれる?何が残る?……なぜ生きなければならぬ?」

誰もいない病室で彼の独白は続く。彼の目は病室の一角に固定されたまま動かない。

『藤島 楓』

だれもいないベッドの脇に、そう書かれたプレートがかかっている。この病室はその名の者が入院していたのだろう。辺りを見回せば、女性が好みそうなぬいぐるみや小物であふれている。ベッドが一つしかないこの病室は彼女の為の個室だったのだろう。

「どうすればお前に会える?もう一度声が聞ける?」

そう呟く十夜の視線の先には、十夜と女性が微笑んで写っている写真が飾られていた。今の彼からは想像できないような幸せそうな

空気が、その写真からは感じられる。

「……………十夜」

圧迫されたような空気のこの病室に、ナースの格好をした女性が入り声をかける。その姿から彼女はこの病院の看護師なのだろう。

「すまない。なかなか片づける気が起きなくてな」

「そんなことはいいのよ。そりより、大丈夫？」

「……………ああ」

何が大丈夫なのか彼女は口にしなかったが、十夜には伝わったようだ。話す口調からも十夜とその看護師はただの知り合い以上の関係なのだろう。言葉は少ないが、会話が成立している。

「……………ごめんね」

「別におまえのせいじゃない。お前はよくやってくれた。これは楓の寿命だったんだ」

そう会話をしているながら、十夜の視線は写真から動かない。

「……………すまない、荷物の整理は頼んでもいいか？」

「ええ、わかったわ」

「頼む」

その言葉を残し、十夜は病室を後にする。

藤島 楓……………享年十七歳

「死んだら人はどうなる？」

そう呟くのはやはり十夜だ。あの後そのまま自宅に戻り、部屋についても頭に浮かぶのはその事ばかりだった。それと同時に、楓との思い出が頭を駆け巡る。彼女の言葉が思い出される。

『お兄ちゃん』

「!？」

彼女が自分を呼ぶ声が聞こえた気がし、辺りを見回すがそんなことはないとかぶりを振る。思考能力がだんだんとおちてきているようだ。

「死んだらどうなるかなんてわかるはずがない」

それはそうだ。死んだ者はもう語る事が出来ない。それゆえに生

きている者が、死後どうなるかを知るすべはない。

「だが、俺は知りたいんだ」

妹が死んで悲しいと思う気持ちは確かにあった。はやくに両親が交通事故で他界し、二人きりの家族となり二人で力を合わせて生きてきた。しかし、すぐに妹に悪性腫瘍が見つかる。それからたった一人の家族のために必死に看病したが、しかし妹は今日逝った。その感情として悲しい気持は確かにあったが、それ以上の想いが十夜の中にはあふれていた。

死んだらどうなるのか

その知的好奇心が抑えられなくなる。この考えは両親が逝ったときにもあったが、唯一人の家族の存在が抑えていた。しかし今日でその抑える存在もいなくなった。十夜にはその感情を抑えるすべがない。

「死んだらどうなるのか。それを知るとはとても簡単だよな」

死後の世界を知識として認識し、共有するのは難しい。不可能と言っただけだろう。しかし、死後の世界を知るだけならばそれは全ての人が可能だ。

「死ねばいい」

そう呟く声にはまったく力がなかった。十夜の手から瓶が転がり落ちる。声だけでなく、体からも力が抜けおちていく。意識は混濁し、もはや動くことはかなわないだろう。

睡眠薬。適切な量を飲めば、意識を睡眠状態へと誘導してくれる薬。しかし、手からこぼれおちた瓶は空だった。そのすぐそばには、その瓶を取り出したばかりであろう空箱が置いてある。異常な量の睡眠薬を飲んだ人間は、適切な処置をしなければ向かう先は一つだ。

「これでやっと知ることが出来る」

その言葉を最期に彼の意識は、暗い、昏い世界へと沈んでいった。

第2章 邂逅

「……ああ、俺もだ」

目の前の男、三浦は特に驚く様子もなく十夜の話聞いてる。

「あなたと同じように、俺もここに来る直前に自殺を行使していた」

話す内容に反して、三浦は納得しているような表情である。

「やはりか」

「やはり？」

話している内容が自殺といった重い話であったため、三浦のかえしは十夜の予想外なものだった。

「ああ。君が寝ている間に、他の人達からはすでに話し終わっていたのね。君の答えも大体予想できていた」

「ってことは、ここにいる全員？」

「全員が応えてくれたわけではないけど多分そうだと思うよ。実際応えてないのは一人だけで他は皆『そう』だ」

確かに応えやすいような内容ではない。言わなかったのは一人だけというのは驚くに値するものだろう。同じような状況といった親近感の芽生えもあったではあるうが……

「寝ている間と言っていたが、ここにはどのくらいじつじつしているんだ？」

「大体六時間ぐらいかな。君以外の皆は同じくらいに目覚めているから他も同じようなものだよ」

十夜以外と言われ思考する。

『多分俺が目覚めなかったのは、死に方の問題だろうな。薬による強制的な永眠なんだ。他の死に方は聞いてないが、多分あっているだろ』

ふと十夜は気になって他の人達の観察をはじめめる。皆一様に落ちて着くというよりは諦観した様子である。また、怪我の様子は無い。自殺と言っても方法は様々であるうが、人外の見た目の者はいなかった。

「君は自分が今死んでいると感じているかな？」

他の人達にも聞いたのだろう、その言葉に淀みはなかった。

「いや、ここまではつきりと『生きている』と感じるのも久しぶりだ」

その言葉の通り、十夜の頭の中は爽快感を感じていた。死後の世界に固執する思考は今はない。興味があるぐらいである。また、絶対に助かるような状況ではなかったはずだが、自分が生きていくということに疑問は感じなかった。

「そうだね。私も他の皆も似たような感じだ」

「ここまでではつきり体もあるし、空腹感だつてあるんだ。死んだなんて思えないだろ?」

そう言いながら視線を三浦以外へと動かしてみる。六時間もこんな場所で監禁されたにしては本当に静かだ。普通もつと騒いだりするものじゃないかと思ったがその考えに否と答える。

『自殺をしようとする人間は普通じゃないよな』

普通に見える目の前の三浦だつてそうだ。普通の状況でこんな風にアンケートをとろうと考えるものはいないだろう。

「ところで……」

ガチャッ

「!?!?」

三浦が声を発したところで突然唯一のドアから開閉の音が聞こえる。皆一様にドアへと視線を送った。

「はじめまして、みなさん」

ドアから現れたのは女性。金髪で年は二十代半ばといったところだろう。容姿もかなり整った女性がそこには立ち、挨拶をする。

「私はリユーネ・ハウズ。……みなさんをこの場所に集めた一人です」

「!?!」

名乗りとともに言われた言葉に、リユーネ以外の人間は顔に驚きを隠せない。が、リユーネはその様子を気にせず言葉を紡いでいく。

「ようこそアスタール皇国へ。みなさんを歓迎します」

「ふざけんじやないわよ」

集団の中から勝気な声をあげて一人の女性がでてくる。十代半ばだろう若さは苛立ちを隠そうともしていない。

「アスタール皇国ってどこよ?そんな国聞いた事もないんだけど?」

「ええ。ここはみなさんの知っている世界ではありません」

「はあ?頭だいじょうぶ?」

女性の口調は荒いが、その言葉はリユーネ以外の者達の気持ちを代弁していた。

「はい。そのことを説明するために私は来たのですから少し黙ってもらえますか?」

女性の言い方に少しムツとしたように、リユーネはかえす。

「.....」

そして彼女も苛立ちがピークに達したような、憤慨した面持ちで元の場所に戻った。無言で踵を返す様子が恐ろしい。

「……それでは説明します。この世界『ディタ』の世界情勢と、あなたたちがなぜ喚ばれたのかを……」

「……………」

もはやその言葉に返答する者はいない。しかし、否定する者もないことから、それは無言の肯定と言ってよかった。

「ここから物語は始まる。その始まりは、終わりから始まった……」

第3章 チカラ

彼女……リユーネの話はまず、この世界『ディタ』の説明から始まった。

リユーネ曰く、この世界は大きな陸続きの大陸で、大きく分けて四つの国から成り立ってるらしい。アスタール皇国、リオル帝国、チオデスタ民主国、ハイド神国。その国々によって特色が大きく異なり、互いに対立し協力しあっているそうだ。

そして十夜たちがいるのはアスタール皇国で、大陸の南に位置する。この国の大きな特徴は皇族が国を治めていることらしい。皇族とは、最初にこの国を纏めた一族で、以来その血縁の一族が王となり国を治める。皇族以外にも貴族と呼ばれる王を補佐する一族が幾多もあり、権力を持つ。つまり、『血』を大事にしている国ということだ。

その他の国の説明は簡単に説明された。北に位置するのがリオル帝国。この国は主に軍事力に支配されていて、将軍と呼ばれる存在が国を治める。西に位置するのがチオデスタ民主国。この国が日本に近い国だろう。国民の代表者が選抜され国を治めているらしい。最後に東に在るのがハイド神国。この国の特徴は信仰。神官と呼ばれる神に認められたものが国民を導いているとのことだ。

「国に関してはこんなところですね。そしてここから説明する事が、あなた達をこの世界に喚んだ理由です」

その言葉でリユーネの話聞いていた十夜達に緊張感が漂う。

「この大陸の中心には歪みがあります。その歪みから生まれる存在が、私達生きとし生けるもの共通の敵とも言える『幽幻種』です。その存在は魔素と呼ばれる存在を壊死させるエネルギーを身に纏い、私達を捕食します」

そう語るリユーネの表情は硬い。

「その幽幻種に対抗するために、貴方達をこの世界へと喚んだのです」

「あの、……いいですか？」

いままで沈黙していた隣の三浦がリユーネに声をかける。

「そもそもここが異世界だというのが信用できないんですが？私から見れば、あなたは重度の精神疾患患者にしか見えません」

三浦の言う事も尤もだろう。ここにいる人間でリユーネの話に納得できるものはいない。いたとしたらその人間は精神疾患にかかっているか、薬物中毒者だけであろう。

「そうですね。ではこれを見てください」

そう言うと、リユーネは右手を前に突き出す。その手の先が歪み、陽炎のように感じると何も無い所から突然炎が噴き出す。

「これが魔術とよばれるものです。貴方達の世界にはないチカラでしよつ？」

その言葉を聞いてる間も、炎はどんどん強くなる。室内の温度も

上昇しているようで、身体中から汗が噴き出る。

「貴方達がこの話を聞いただけでは納得して頂けないのは分かっています。私達もこの説明は『三度目』ですから」

溢れ出る炎は意思を持っているかのように部屋中に拡がり、その炎から逃れるように十夜達は部屋の中心に集まる。

「ちょ、何やってんのよあんた！いいからこの火消しなさいよ！」

「熱っ！助けてくれ！」

「お前らどけよ！燃えちまう！」

「だから、貴方達に分かりやすいように私達もいろいろ考えました」
リユーネはその騒ぎが全く聞こえていないかのように説明を続ける。

「ただやっぱり話ただけでは納得して頂くのは難しいというのが結論です。ですから実力行使になってしまいますけどごめんなさい」

その言葉を最後に、炎は十夜達を包み込んだ。

「……………ここは？」

「目が覚めましたか！？痛むところはありませんか？」

十夜が目を覚ますと同時にリユーネが声を発する。

「いや、特に痛いところはないが……………」

そう言いながら辺りを見回す。清潔感があり、白を基調とした室内は病室を連想させた。どうやら十夜はこの部屋のベッドに寝かされていたらしい。

「本当にすいません。まさか『換装衣』が発動しない方がいるとは思いません……………」

「かんそうい？」

その言葉に疑問を感じながら、意識を失う前の事に思考をめぐらす。そこで自分をが焼き殺されたことを思い出す。

「乱暴な実力行使だな？」

「そんな……………本当にごめんなさい」

意識を失う直前のリユーネの言葉を皮肉に用いれば、目の前の女性のはみるみる青褪め謝罪の言葉を発した。

「それよりも」は？」

「え？あの……城の医務室です。危険な状態でしたのでここで治療を行いました」

十夜の態度に面食らいながらも、リユーネは疑問に答える。目覚めてからの態度をみても、悪い人ではないように思えてきた。殺されかけたが……

「他の人達は？」

「今は訓練中だと思います。あの後皆さんに一応納得してもらって、幽幻種に対抗するためのチカラを養ってもらっています」

その言葉に十夜は疑問を感じた。あれだけの炎に焼かれたのに皆無事だったのだろうか？そして、この目の前の女性の言葉を信じたのだろうか？……と。

「そうですね。貴方は換装衣が発動しなかったのでまだ納得できていないですよね」

「さつきも思ったがそのかんそういつてのはなんだ？」

「それは……」

ガチャッ

リユーネが十夜の疑問に答えようとしたところで、この医務室のドアが開く。そこには十夜が会った事のない男性が立っていた。

「よう、起きたのか新入り。調子はどうだ？」

「……あんたは？」

飄々とした声に疑問に答えてもらうところを邪魔され、若干不機嫌そうに十夜は声を出した。

「俺は第六部隊隊長の佐伯龍 さえき りゅう だ。お前と同じ世界の人間だよ」

「そうか」

「え？」

同じ世界の人間という言葉に了承を返した十夜に、リユーネは驚きの声を出す。

「信じてもらえたんですか？」

「半分はな。あんな炎で焼き殺されそうになれば少しは信じるさ。しかも、確かに熱いと感じて皮膚が焼け爛れたのを見たのに起きれば無傷。この状況からも少しは信じてみようと感じる」

「……すみません」

十夜の言葉で、その炎を出したリユーネは気まずそうに謝罪した。

「まあまあ。まさか死を直前にしても換装衣が発動しないなんて思いもしなかったんだ。そんな責めてやるなよ」

「別に責めていない。今も痛みがあるなら違うかもしれないがまったく痛みは残っていないからな。で、そのかんそういつてのはなんだ？」

「ここでやっと中断された疑問を投げかける事が出来た。」

「そうですね。説明の途中でした。換装衣についてはまず見てもらった方が早いと思います。龍さん、見せてあげてください」

「おお、分かった」

言葉と同時に、龍は力を集中するように目を閉じる。すると龍の体から昏い霧のようなものが溢れる。その霧に包まれ、少しするとそこには全身を赤黒い鎧に包まれた二足歩行の物体が立っていた。ソレを目の前になると、体の奥底から恐怖がにじみ出てくる。

「これが換装衣だ」

その鎧からは先ほどの龍の声が聞こえてきた。顔まで完全に鎧は覆っていたので分からなかったが、その存在は龍で間違いないのだろう。しかし、その飄々とした声が聞こえても、その存在を目の前にした時の恐怖は晴れなかった。

第4章 戦い（前書き）

やっと話が少し動きだしたような気がします。実際、この後の話ばかりが頭の中で組みあがり、ここまでするまでを書くのが面倒で仕方ありませんでした。ただ、やっと頭の中の話の形に出来るとホッとしたところではあります。

第4章 戦い

「右から回り込め！」

「ぼやぼやしてんな！」

「さっさと死になさいよ！この化け物！」

喧々囂々とやかましい戦場。その少しはずれで拘束される十夜の姿があった。

「これが……換装衣？」

目の前には全身を赤黒い鎧に包まれた龍がいた。

「ああ、カツコいいだろ？」

そっぴいなながら、いつのまにか昏い霧に包まれ、鎧を纏う前の龍が目の前にいた。

「今のが第六部隊『暴食』隊長である龍さんの換装衣です」

「暴食？」

「はい、異世界の方たちは貴方を除いて皆、換装衣と呼ばれる鎧を纏う事が出来ます。その換装衣の特性に応じて七つの部隊に分けられ、その一つが第六部隊である暴食です」

龍の換装衣の呆けていた十夜にリユーネは詳しく説明した。

「この換装衣を纏うことにより、幽幻種の魔素の力を中和することが出来るのです」

「そう。で、俺たちはこの力を使って幽幻種と戦争しているのさ」

リユーネの言葉に続く龍。しかし、十夜にはまだ納得できない事があった。

「その換装衣は俺以外の皆は発動したのか？」

「ええ。実は貴方達がここに喚ばれる前にも二度この世界に召喚を行う事がありました。そのとき喚ばれた方も含めて、換装衣を発動しなかったのは貴方だけです」

「俺だけ、ね。それはどうでもいい。その換装衣を発動した俺と一緒にこの世界に喚ばれたやつは訓練しているんだよな？」

「はい。皆さん幽幻種と戦うために訓練に励んでいます」

「……………なぜだ？」

十夜にはこの点が疑問だった。異世界に喚ばれた。それはこの世

界の人間が幽幻種とやらと戦う人材が欲しかったから。俺以外の人には換装衣という戦う力がある。そこまでは渋々ながら納得する事が出来た。しかし……

「なんで皆戦うなんて事を納得したんだ？」

十夜を含め何かと物理的に戦うなんて事を日常としてきた者などいたのだろうか。もしいたとしても、それはごく少数のはずである。そんな人間が、力があるから異世界の化け物と戦うなんて納得するはずがない。そしてそんなある意味前向きな行動が出来る人間が『自殺』なんてするはずがない。十夜は、意識を失う前に三浦から、あそこにいた人間が全て自殺を行った事を聞いている。

「それは俺が説明してやろう」

そう言うのは先ほどまでとは違い、真剣な顔つきになった龍だ。

「俺もここに喚ばれる前に一度死んだ。自分で自分を殺したんだ。お前もそうだろうか？」

「……ああ」

「俺を含めここに喚ばれたやつは皆そうだ。そんな生きることから逃げ出すようなやつらが、何故異世界のために戦いなんて事をするのか」

「……………」

カンカンカンカン。遠くからけたたましい鐘の音が響く。

「俺は本能だと思っている」

「本能？」

「ああ、そうだ。幽幻種を前にすれば分かる。その時俺が感じたのは、どうしようもない恐怖と嫌悪感。そして……」

バタバタとこの部屋の外で騒がしい音が聞こえる。あの鐘の音のせいだろう。なにか緊急事態なのかもしれない。

「圧倒的な殺戮本能だ」

龍からは外の喧騒はまったく聞こえてないような雰囲気を受ける。しかし、そわそわとしているリユースネから、外の喧騒は実際のものだと理解した。

「ちょうど良く現れたみたいだし、お前も行くか？」

その口調は、まるでこれから食事にでも行くつとでも言うつように、

「ちよっくら戦争に」

それは告げられた。

「おう、どんな感じだよ？」

十夜に話しかける龍の口調はあくまで軽い。

「最低だな」

軽い龍に反して十夜は心底最低といった感じで声を出す。傍目から見ればあきらかに体調が悪そうだ。

「換装衣が発動しないから不安だったが、どうやら問題なさそうだな」

「ああ」

そういう十夜の周りには動きを封じるように、換装衣を纏った龍が拘束している。

「あいつらをぶち殺したくてたまらない」

渴望する視線の先には十人ほどの、龍とは違うが、どこか似たような換装衣を纏う者達。その彼らが戦う化け物がいた。

化け物の数は二体。ライオンの体に猛禽類の鳥の頭をくつつけたようなのや、人の四肢が獣のようになっていて頭は昆虫のような形をしている化け物がいた。そしてどちらも体から昏い霧のようなものがふきでている。あの霧が魔素であり、それを纏う化け物が幽幻種と言われる存在なのである。

その幽幻種を見つめる十夜の瞳は片方が金色に変化している。そ

してその瞳には、殺意以外何も浮かんでいなかった。

「まあ今回はおあずけだな。俺だって我慢してるんだ。お前もちょっとは我慢しろよ」

その言葉は届いていないであろう。少しでも力が抜ければ目の前の戦場に飛び出ていく。十夜の瞳から窺える殺意は衰える事をしかなかった。

そして戦場からは終息の気配が立ちこめる。二体の幽幻種はどちらも切り刻まれ、矢を撃ち込まれ、鈍器で殴られ満身創痕となっている。もはや立っているのが不思議なぐらいだ。

「つらあ！」

「死になさい！」

「あはははははは」

しかし、その満身創痕の二体を前にしても、換装衣を纏う兵士たちは攻撃の手を緩めることはなかった。いや、いつそその攻撃は烈火のように激化している節すらある。

「 f j s p d j f g j f s h a 」

二体の幽幻種から断末魔の声が上がり、その体が地面に倒れ込む。しかし、倒れた幽幻種に対して攻撃がやむことはない。ある者は手に持つ剣で串刺しにする。ある者は矢を打ちすえる。ある者はハンマーで頭を打ち砕く。

「お前ら終わりだ。帰るぞ」

十夜を拘束する龍から終了の合図が入る。その時になってようやく兵士たちは攻撃を終えたのだった。

「お前も落ち着いたか。ん？」

拘束を解く龍は十夜の左手に注目する。その手にはいつのまにか漆黒のグローブと、それに巻きつくように鎖があった。

第5章 すれ違い

一日経過し、今では気持ちも落ち着いていた。しかし、あの空気を忘れることは出来ない。

張りつめた緊張感。飛び交う怒号。言いようのない恐怖。これだけでもあの場を忘れる事が出来ない理由にしては十分だろう。しかし……

それすらも色褪せるような殺意。

あの一瞬……幽幻種と呼ばれる化け物を見た瞬間に、それまで感じていたものは吹き飛んでしまった。

連れられていったその場所はすでに戦場だった。耳が痺れるような怒号を聞いて恐怖し、その空気に飲まれていたのを覚えている。その声に近付き、換装衣を纏った自分の同郷の者達を見て、自分とは別次元の存在だと思った。あの見てわかるほどの狂気を孕んだ姿、戦場という場所だけではなく、味方であろうあの兵士たちですら恐怖の対象であった。しかし……

幽幻種が目映った時、その全ては些細な感情だと今では思う。それほどに圧倒的だった。

目の前の存在が動いている事が許せない。存在している事が赦せない。消してしまいたい。その気持ちは、確かに本能と呼べる感情だっただろう。それほどに、幽幻種を滅ぼしたいと望んでいた。

そして自らの左手へ目を向ける。

漆黒の指の所が空いた形状の手袋と、それに巻きつくように存在する鎖。どうやって身につけたのか分からないほど、ソレは左手に馴染んでいた。そして、同じようにいつから『そう』なのか分からない右目。元々は日本人特有の黒眼であったはずだが、今は金色に変化している。

あの戦闘の後、休むための部屋をリユーネが用意してくれていた。その部屋の鏡の前で、自分の姿を確認しながら思う。

ああ、『これで闘える』、と……

コンコン。

「どござ」

ノックの音が響き、開閉の許しの言葉を出す。今の自分を訪ねてくる人は少ない。

「おはようございます」

「おはようございます、リユーネさん」

ドアの先に居たのは、予想通りリユーネの姿があった。その彼女に向かって挨拶を返す。

「落ち着かれたようですね」

そう言うリユーネからは安堵の表情が見て取れる。それほど自分の様子は不安定だったのかと思いを巡らせ、その事実思い至る。

大切にしていた最後の、最愛の家族である妹の死。それによって行われる、自分自身の知的好奇心の為の自殺。しかし、気がつけば異世界で目を覚ますといった、自分の意図を無視した結果に、目覚めた当初は苛々していた。その後目を覚ました時には、目の前に自分を殺害しようとしたリユーネがいて慥然としていた。会話をし、ある程度リユーネの行動に理解出来た。しかし、落ち着いてリユーネの事を見れば、その美しさに緊張が走る。その後会った時は、まだあの本能的な狂気の名残があった時である。

(思えば普通の状態で会うのは初めてだな)

綺麗な女性と会話する緊張感はまだあるが、最初に比べればだいぶましだ。

「準備も出来ているようですし、行きましようか？」

自分の思考の世界へ旅立っていた時のいきなりの発言に、反射的に返答する。

「どこへ？」

「兵舎にある会議室です。昨日で説明しきれなかった事を話したいのですが、そこで見てもらった方が早いものもありますので」

「わかりました」

短いやり取りの後、部屋を後にする。まだまだ聞きたい事はたくさんある。それを説明してくれるのだから、断る理由は一つもなかった。ただ、リユーネの事務的なその口調に、まだまだ緊張がなくな

なるのは難しそうだと考えるのであった。

「……………」

「……………」

互いに特に会話もなく歩いていたが、リユーネの内心は緊張でいっぱいだった。

(この人、苦手……………)

元々まだ年若いリユーネは堅苦しいものが嫌いだった。しかし、自分の立場等を考え、しかたなく会話も敬語を使っている。

そんなリユーネにとって自分の後ろを歩く青年は、理不尽に思えて仕方がなかった。自分が初めて彼等にこの世界の事を話した時も、彼の印象はその他大勢にしてしまうには強過ぎた事を思い出す。

容姿的には整っているとは思いますが、あくまで一般より少し整っているぐらいだ。その見た目で目立っていたわけでは決していない。

ここは異世界だと言っても変わらない無表情。自分が炎の術式を展開した時も、それが崩れることはなかった。しかし、リユーネの

考えていた事と違って彼には大きな火傷を負わせてしまう。その事を謝りたいが為に彼の治療を勝手に出て、まるまる十日間彼に治療術を施し続けた。

そして彼が目覚め、謝る事が出来たが、『もう痛くないから構わない』と軽く許される。その時も無表情のままだった。その後いろいろな質問に答えたが、その間も無表情でやり取りされ、彼が本当に疑問に思っているのかすら分からない。実際の十夜の思考を知らないリユーネには、その苦手意識がつくのは当然のことだった。

(佐伯さんに連れられて戦場に行ったかと思えば、片目は金色だし変な装備してるし、むちゃくちゃ恐かったし……)

龍と一緒に戻ってきた十夜の様子を思い出す。出撃前とは変わった見た目以上に、その狂気に満ちた雰囲気はより強い苦手意識をリユーネに植え付ける。

朝、十夜を呼びに来て挨拶を返す彼に安心したが、すぐに端的な事しか話さないのです、とつつきにくさも感じている。

これでもリユーネは若輩ながら、魔術師の実力においてこの国でも一目置かれるエリート的な存在だった。それ故に異世界人である十夜達のファーストコンタクトに選抜されたのだ。換装衣という力を持つ異世界人にはある程度の自衛の力を持つ人間が必要であり、リユーネにはその力を持つ自負もある。また、龍といった、十夜達が喚ばれる以前にこの世界へ来訪した存在との交流もあったため、その狂気の慣れもあったのだ。しかし……

(あの時のこの人の狂気は他と全然違う)

自らも戦場に立てるだけの力を持ち、戦場に立った事もあるリユーネにはそれは屈辱的だった。戦場を齧っただけの青年の殺意に、その狂気に圧倒されたのだ。

(しかも、佐伯さんが言うにはアレで落ち着いてたらしいし……)

その事実も十夜に対する苦手意識となっているが、その意識のせいで未だにリユーネが知ることが出来ない問題が一つある。

(この人……名前すら分かんないんだけど)

この事にリユーネの理不尽だと感じる思いは集約する。実際十夜は、名前ぐらい名乗っただろう。しかし、機嫌的な問題で自分からわざわざ名乗るような事がなかったただけだ。事実、三浦には聞かれなかったが名前を名乗っている。

それは話すタイミングを最初に逃し、十夜自身にまったく悪気はないのだが、リユーネの苦手意識は一方的に十夜が悪いと決めつけていた。

(とにかく早く着いてえ)

目的地である兵舎の会議室には、龍を含む何人かが待っている。その事を知っているので、なおさら『会議室にさえつければ』というリユーネの逃走意識は高まる。

傍目にはお互い語らず、黙々と目的地へ向かっていた。しかし、このリユーネの脳内会議は目的地に到着するまで止まることはなかった。ここに、人間関係のすれ違いが起きているとは互いに理解できずに……

第5章 すれ違い（後書き）

やっと思い描いていた十夜像に近付ける事が出来ました。

m ただ……今回全く話が進まずに終わった事をお詫びしますm（――）

第6章 理由

「よう、だいぶマシな面になったじゃねえか」

リユーネに案内された部屋に入ると、すぐさま声をかけられる。

「おかげさまで」

昨日迷惑をかけた手前、気恥かしさもあつたがそう言葉を返す。

「まあ大丈夫そうなら安心だ。ほら、ここに座れよ」

そう言つて龍は円状に配置されたテーブルの隣の席をたたく。ここにはリユーネ以外の知り合いはいない。軽くリユーネを窺つて見たが、問題なさそうだったのでその席に座る。

「そついや、ここで何を話すかもう聞いたのか？」

「リユーネさんからはまだ説明できてない部分が聞けると聞いてますけど？」

「ああ。ま、それもあるか」

龍の返す言葉はどことなく齒切れが悪い。それ以外に自分が関わる話があるのだろうか？ 実際、自分はほとんどなにもわからない状態だというのに。

「だけどその説明にこんな人数いると思うか？」

そう言われ、辺りを見回す。自分達を合わせれば九人がこの部屋にはいる。確かに説明をするだけでこの人数は必要ないだろう。しかもこの部屋にいる全員が、自分を意識している空気が伝わってくる。正直あまり居心地は良くない。

「じゃあ、ここでいったい何を話すんです?」

「お前の扱いについてさ」

「俺の?」

ガチャ。

龍の言葉を理解する前に自分も通ったドアから新たな人物が入室した。

「待たせたな。それでは始めるとしよう」

その人物は席に着くと同時に、そう発言する。龍に聞きたい事があつたが、今聞くのはまずいだろう。別にこれからその内容を聞けると自分を納得させ、最後の入室者の方を向く。

「まず、はじめまして異世界の若者よ。私はこの国のケテルのバッハ・アスタール・ジークハルト。よろしく」

「はじめまして。藤島十夜です。……: すいません、ケテルというのは?」

「ああ、王という意味だよ」

「!?!」

自分に話しかける男性の言葉に息をつまらせる。どう見ても三十には届かないであろう男性が王とは想像もしていなかった。その驚きに「やっと名前が分かった」というリユーネの呟きは耳に入らなかった。

「そんなに驚かなくてもいいよ。この国じゃあ血筋がケテルの基準だ。私自身そうたいした人間じゃない」

そう語る王、ケテルの表情は苦笑気味だ。いきなり国のトップが出てきて驚かない人なんていないと思うが……

「それで藤島君。……ちょっと違うなあ。うん十夜君と呼んでもいいかな?」

「は、はい」

「うん。じゃあ十夜君……」

このケテルの親しみやすい雰囲気、違う言い方をすれば馴れ馴れしい感じにはまったく不快感はなかった。そればかりかとても安心感がある。これがカリスマというものかと、思考していた頭は次の言葉で一気に冷める。

「君は『何』だい?」

突然ケテルの雰囲気が変わる。厳格な調停者を思わせるその威圧感に、先ほどまでの親しみやすさはない。そこにいるのは確かに国を治める一人の王がいた。

「何……とは？」

「……そりゃ分からないよね。いきなり変な質問ごめんね」

そして、一瞬の威圧感は跡形もなく消える。

「ただ、私達も君の存在を疑問に思っている。それを分かって欲しかったんだ」

「存在ですか？」

「そう、存在だ。君は君自身の特殊性を理解しているかな？」

そう言葉を紡ぐケテルに、何と返せばいいかわからないので自分に分かる事を話すことにした。

「理解している事は少ないです。何故死んだはずのこの身が生きているのか。換装衣とは、幽幻種とは何か。なぜ幽幻種を見ただけであんな殺意が湧きあがるのか。この瞳とこの左手に在るものは何なのか。……分からない事ばかりです」

先ほどケテルが見せた二面性は、十夜の内には確かな信頼感を築いていた。確かなカリスマ。そしてそれだけではない王としての厳格さ。それは人の上に立つ品格としてそこに存在する。その信頼により、胸の内に在るものを素直に口に出来たのだろう。

「そうだね。突然ここに喚ばれた君は分からない事ばかりだろう。そして、少しだけなら私はその答えを持っている。まずは私の話を聞いてもらえるかな」

「はい」

さきほどのカリスマや厳格さとも違う、いうなれば慈愛の顔。いったいいくつの顔を持つのかと思いつながら、十夜はどんどんこのケテルという存在に魅せられていった。

「まずこの世界に喚ばれた君たちの基準。ソレは何だと思う？」

「自殺……ですか？」

「確かにその行為は大きな基準にはなる。ただ、それが全てじゃない」

ケテルはただひたすらに優しく語る。

「まず絶対的な条件として、君たちが元の世界で死んでいる事が必要不可欠だ。死者でなければ異世界を渡るなんて事はできない。所謂人の魂というモノが、世界を渡ると理解してくれ」

「はい」

この説明だけでは実際納得できない事があった。しかし、話を聞くと言った以上、話の腰を折るわけにはいかない。

「そしてもう一つの条件が、心に深い闇を持つ者ということだ。これがなければ換装衣を発動する事が難しくなる。その為、自殺という手段で命を絶った者が選定される基準となったんだ。自分の人生を自分で絶つ事は、それなりに闇を抱いていないと難しいと考えられるからね」

「なるほど」

「つまり、私達が異世界から人を喚ぼうとした時に、自殺によって命を亡くしたのが君達だったんだ」

これで自分が換装衣を纏う事が出来なかった理由がわかった。自分が命を絶った理由は知的好奇心だから、換装衣を纏うほどの闇を持っていなかったのだろう。しかし、自殺によって命を絶ったのも確かな事実。それで換装衣を纏えない十夜が招かれたということだ。

「それで私達の疑問が生まれたわけだよ。換装衣を纏うことのない君は、一体何故この世界に喚ばれたのか、とね」

「それは俺が自分の欲求に従って自殺したからでしょう」

自分の中で答えが出て、それは他人には理解できるはずもない。この尊敬するケテルに、自分の考えを聞かせることにした。

「俺は六歳の時に両親を亡くしました。それからは妹と二人で生活していたのですが、俺の中にどうしようもない疑問が生まれていました。……死とは一体何なのか」

その時のことを思い出し、妹の事を思い出す事で胸にチクリと痛みが走るが十夜の語りは止まらない。

「そのことをずっと疑問に思いながら生活していましたが、もちろん答えは一つしかありませんでした。知るためには死ぬしかない。その行為に及ぶ事を抑制していたのが妹の存在です。だけど、その妹も病で逝きました」

「君は孤独になった悲しみからではなく、好奇心で自ら命を絶ったのかい？」

「はい」

ケテルの髪と同じ翡翠色の双眸が俺をみつめる。その時、十夜の話聞いていた他の者からの困惑した気配が伝わってくる。

「なるほど、君が換装衣を纏うことのない理由は理解した。……君から質問はあるかな？」

「ひとつだけ聞きたい事があります」

ケテルの言葉に先ほどから引つかかっていた疑問をぶつける。

「この世界にわたるのは魂と仰っていましたが、それでは今のこの肉体は何故存在するのでしょうか？」

「……さっきは君達に対する条件を説明したが、私達がどうやって君達を喚んだのかは言ってなかったね」

「はい」

ケテルの表情は重い。

「私達は魔術を使う事が出来る。その中に召喚というものがある。これは違う場所に在るものを呼び寄せる魔術だ」

この話が十夜の質問の答えに成りえるのか。疑問に感じたが、ケ

テルの身を切るような雰囲気という言葉に割り込む事は出来なかった。

「この魔術を応用したものが君達を喚んだ技術だ。そして、これを成功させるために私達が用意したモノがある」

この室内にいる全ての者がその事を知っているのだろう。重苦し
い重圧が感じられる。

「百人の生贄だ。そしてその条件は、魔術を行使できる事。それと、
幽幻種に深い怨嗟の念、恨みを持っていることだ」

第6章 理由（後書き）

また説明だけで終わってしまいました。もっと話を纏めれるようにならないとだめですね。

次話は戦闘シーンが入る予定です。

第7章 獣

アスタール城内に在る一室。ベッドの上に横たわる人物からは、紫煙が吐き出される。

数時間前の会議室での一幕から、抜け出せない十夜の姿がそこにはあった。

「犠牲の上に成り立つ狂気……ね」

この国のケテルと呼ばれる王の言葉は、残酷なまでに理解することが出来た。

「人の血肉で構成された身体と、怨念から生まれる本能」

あの会議という名の授業で、今率先して知りたい知識を得ることは出来た。その結果はとも血生臭いものではあったが……

しかし、あの場にいた者達の主な目的は、自分に知識を与えるためではない事は分かっていた。その時の話し合いには、嫌、あれは話し合いではないなどその時の出来事に思いを巡らせる。

十夜の質問に答える事、ある意味授業のような会話は一端終了した。しかし、そこからがこの集りの真の目的であったのだろう。先程まで沈黙を保ち、我関せずを貫いていた他の者達が、意識的に参加してきた空気が伝わってきた。

その雰囲気察して、この場の責任者とも言えるケテルはその口を開く。

「では改めてこの場にいる者の紹介をしたいと思います」

それまでは十夜とケテルの質疑応答だけだったので特に問題はなかったが、この場にいる全員で話すのならば最低限の認識は必須だった。

「ここにいるものは、私とリユーネを除いて全て皆この世界に招かれた者達だ」

その言葉は主に十夜に対して聞かせるためだったのだろう。その言葉に辺りを見回してみる。確かにその二人以外には日本人を思わせる風貌の者が集まっていた。

「そして『七つの大罪』の各隊長の者たちだ」

「七つの大罪？」

「そうだ。七つの大罪とは君達異世界の者を七つの部隊に分けたその総称だよ」

その言葉の通り、確かに第六部隊の隊長を名乗っていた龍の姿はそこにはある。同じく耳にした『暴食』というのはその部隊名のよ
うなものだろう。

「第一部隊『傲慢』の一馬。第二部隊『嫉妬』の愛璃。第三部隊『憤怒』の玲奈。第四部隊『怠惰』の拓也。第五部隊『強欲』の浩之。第六部隊『暴食』の龍。第七部隊『色欲』の遙。とりあえず詳しい交流は各自したければ別の機会にしてくれ。今は各立場と名前だけ認識してもらえば構わない」

一息に言っただけなので軽く息を整え、ケテルはその後の言葉を繰り出す。

「集まってもらったのは、十夜をどの部隊へ所属させるかを話し合おうと思う」

「俺は拒否する」

ケテルの言葉に、すぐ否定の言葉を出したのは傲慢と呼ばれた一馬だ。

「そもそも換装衣がない人は戦えないんじゃない？」

一馬の言葉を自らも肯定するように言ったのは、嫉妬の愛璃だ。しかし、その言葉には納得なのか一様に沈黙の肯定が成される。

「龍も同じ考えかい？」

「拒否は拒否だが、理由は少し違うかな」

「ほお。どんな理由かな？」

ケテルに尋ねられた龍は、周りとは少し違う反応を示す。唯一の顔見知りである龍の言葉に、十夜は固唾をのむ。

「俺には十夜を抑える自信がない」

「は！軟弱ね」

龍に強く返すのは憤怒の玲奈。

「たしか貴方はこの新入りさんを戦場へ連れて行ったのですよね？だからですか？」

逆に値踏みするような発言は強欲の浩之。

「ああ。あの狂気は俺達なんか比べ物にならないな。実際抑え込んで俺はしばらく戦闘出来そうにない」

「凄い。新入りちゃんは将来有望かな？」

「……………」

龍の言葉に反応したのは色欲の遙。終始無言なのは怠惰の拓也。

「だったら……………」

終始好戦的な感情を隠しもしなかった玲奈は、面白そうに口を開く。

「その力を見せてもらおうか」

自分が発現する隙もなく、流れに身を任せる十夜の受難は続く。

自分の認識の違いを、改めて実感させられた。

目の前には赤い換装衣を纏う憤怒の隊長である玲奈。先程から恐ろしいまでの勢いで、その手に持つ人の背丈ほどの巨大な斧を振り回す。あれは直撃すれば、人生のお別れが出来る事は間違いないだろう。

コロッセオのようなこの場所。訓練所と聞いたが、確かに自分達が来る前から多くの者が訓練に励んでいた。いまその訓練をしている者と、目の前の玲奈以外の隊長は外周の観客席にいる。目を凝らせば龍や、三浦の姿が確認できた。

十メートル程距離をとって、観客席に目を向けた十夜に脅威は一足で迫る。

「よそ見してんじゃねえ！」

突進の勢いそのままに、袈裟切りに斧を振ってくる。それをバックステップで避けるが、その風圧だけで胸が少し切れている。あんな重そうなモノを纏っているのに、その動きは呆れるほど速い。

しかし、大振りの攻撃を避け、この瞳が認知する急所に向け左手を突き出す。その左手の先から鎖が伸び、標的へ向けて意思を持つかのように迫るが、すぐに体勢を立て直した玲奈の斧によって防がれる。しかし、勢いは殺せなかったのかそのまま十メートル程吹き飛ばす。

それを見た十夜の口元は、不気味な程に笑みを浮かべる。

驚くべきはその身体能力。一般人であつた十夜にこんな動きは出来ないはずだが、力がみなぎるように軽い。そしてこの視覚。見る対象の急所が分かる。心臓の位置ですら今の十夜には正確に視^みえている。しかし、その事すらも十夜の異常さの前には、些細なこととして感じられていた。

突然こんな場所に連れて来られ、拒否する権利を剥奪され、理不尽に戦闘させられている自分。その状況すらも、この至福を与えてくれた歓迎すべき事であつた。

ここにいて闘う事が出来る。

強制的に闘い挑む目の前の存在に遠慮はいらない。

理不尽に命を奪つても構わない。

今十夜の頭の中では、目の前の玲奈ですらただの肉片にすぎなかった。戦闘という行為が開始されて時間がたつごとに、理性が壊れていくのを感じる。あの幽幻種を目の前にした時の狂気がゆっくりと顔を出す。

気づけば自ら目標との距離を詰め、左の凶器を狂気に従って振り下ろす。

「なんだ！？何なんだお前は！？」

玲奈も最初のころは手加減して攻撃していた。しかし、少しずつ十夜の異常を感知する。目の前にいるからこそ、より確かに感じる事が出来たのであろう。追いつめられるように十夜に対して攻撃を繰り返していた。しかし、狂気に吞まれた体はいつも通りに動かない。そして今、自分の命を奪うであろう災いが振り下ろされる。

周りで見ていた他の隊長はその十夜の異常を感じるのが少し遅かった。その中でも、龍が最初に飛び出しすぐさま他の面々も動き出す。換装衣を纏い、一匹の獣と化した青年へ意識を絶つ攻撃を仕掛ける。

戦闘をいく龍の拳が、背後から十夜めがけて迫る。しかし、背後からの不意打ちともいえる攻撃に十夜は反応し、避けようとする。

「ちっ！」

舌打ちと共に、拳をただ当てるために強引に捻る。ただでさえ戦闘に耐えられない負傷を負う龍の体からは、その無理な動きに悲鳴を上げるが意志の力で成し遂げる。その甲斐あって、拳が十夜の体を掠める。

人外の威力を誇る換装衣の攻撃は、掠めただけでも十夜の生身の体を小枝のように吹き飛ばす。

そして異常ともいえる獣は、まだ息はあるが、しかしあっさりと

討伐されるのであった。

第7章 獣（後書き）

はじめて戦闘シーンを書いてみましたが、難しいですね。一人部屋の中で実際に動いてそれを描写しようと思いました。まったくうまくいきません。

これからもっといろんな描写を学んでいきたいと思っています。

第8章 慈愛

「君をどうするべきなのか。悩みどころだね」

あの模擬戦から三日経っていた。本来ならすぐにも話したかったらしいが、どうにも体が動くようになったのが昨日の晩からなので仕方がない。そもそも何人も魔力と怨念から生み出された換装衣の一撃をもらったのだ。生きていただけでも大したものだと思う。かすっただけだが……

「どう、とは？」

目の前にいるのはこの国のケテル。王の称号を持つものだ。このケテルが困ったような言葉を出そうとも、その雰囲気と顔が穏やかなままなのであまり困っているようには見えない。

「魔力は一流。武器も一流。狂気は異常。防御に関しては三流。どの部隊もあの後君を部隊に入れるのを拒否するし、困ったものだ」

そう言う表情はやはり笑顔のまま。ただその言葉には、自分でも納得していたので返す言葉がない。あの時の事はしっかりと覚えてるが、自分が部隊を率いる立場であつても拒否してしまいそうだ。それはそうだろう。ショットガンを振り回す薬物中毒者みたいな男を誰が好き好んで部下にしようと思うのか。

「すみません」

先の思考にたどり着いた時、しかし自分にはどうしようもない事なのでとりあえず謝ることにした。

「全部君のせい、とは思っていないが……やっぱり扱いづらいね」

殊勝な十夜の姿とあの狂ったような姿を比べてしまい、ケテルは苦笑いを浮かべる。

「通常の異世界の住人は、換装衣を纏い、間違ってもその狂気の本能を同じ人間に向けることはなかった。だけど、君は色々な意味で規格外すぎる。君はあの時、その狂気を憤怒の隊長に向けていたね？」

「はい」

最早質問ではなく確認するような言葉に、素直に肯定の意思を示す。

「君達は元々自殺者だ。やはりどこか心が壊れている。その方向性で部隊が分かれているんだ」

素直な十夜の姿を認め、ケテルはそれ以上の追求をせずに別の話を始める。

「それが大きく分けて七つ。だから七つの大罪。だが、君にはそれすらも当てはまらない。だからとりあえず、何処かの部隊に割り込ませようと思ったのだがそれも難しくなった。本当にどうしよう？」

別の話ではなく、別方向から十夜を責めるようにしたようだ。

「戯れはその辺にしてください、ケテル」

「わかった」

しかし、そのイジメは思わぬ所から救済が入る。その声は戦慄さえ覚えるほど冷たい女性の声だった。

この部屋はいわゆる謁見の間と言われる場所らしい。だから、この部屋の玉座に座るケテルを挟むように男女が立っていたのだが、護衛が何かだろうと気にしていなかった。しかし、あるうことかこの国のトップに軽くだが注意し、それをケテルが素直に聞いたことに十夜は驚いた。王制を採っているからには絶対権力制だと考えていたからだ。しかも、反対の男性は笑いを堪えている節すらある。

「じゃあ真面目に話を進めよう」

その言葉を吐くケテルの表情は真剣だ。今注意した左に立つ女性に怯えている様子すらある。

「十夜はこの七つの大罪はどうやって分けていると思う？」

「いえ、わかりません」

十夜にとって苦言が止まる事も、真面目な話をされることも望んでいる事なので、ケテルの態度を聞いたりはしない。ケテルを注意した女性が恐いので、場の流れに身を任せたのも一つの、大きな理由だ。

「大体は換装衣を纏う事でわかる。雰囲気という抽象的ではあるが、絶対的にその違いは感じるはずだ」

そう言われ、過去に見た換装衣を纏う人達を思い出す。確かに戦場で見た龍とその部下達はどことなく同じ存在なのを感じられた。しかし、龍と玲奈が同じかと聞かれれば、違うと即答できる。

「その特色が七つの大罪の分け方だ。ただ、君は換装衣を纏わずただその左手のモノだけを顕現させている。だからこそ、どの大罪に入れるか決まらずにあの話し合いの場を設けたのだ」

決して話し合いなんてものではなかったが、敢えてその事には突っ込まない。話を中断させてあの女性の怒りを受けるわけにはいかない。

「ただ、その部隊分けも難しくなったので、別の方法をとることにした」

その言葉に両脇の男女が一步前へ出る。

「この世界の七つの美德の二柱。『慈愛』のセレナ・レウスと『友情』のハルク・レイザーだ」

紹介に合わせて二人の男女は頭を下げる。

「十夜にはこの二人と行動を共にしてもらうことにした。仲良くな」

言いたい事を言うと、ケテルは玉座から立ち上がり、この部屋を後にした。後に残るのはこの三人のみ。

「とりあえず、腹も減ったから食事しながら話さないか？」

「ぼくはべ、ぎいでいいば？」

「口にモノをいれながらしゃべるな！」

容赦ない突っ込みがハルクを襲う。拳で。

あの後、ハルクの言葉に異論はなかったので食堂へと場所を移した。そこで改めて自己紹介を交わし、食事をしていたところだ。

「ハルク。今のはお前が悪い」

名乗った後に、お互いに敬称はいらぬ旨を伝えたので名前で呼び合っている。

「痛たたたた。口の食べ物吐き出すかと思った」

「汚い事を口にするな！」

「うふっ」

昼食時には少し遅い時間だったのだろう。その食堂には、三人以

外の姿はない。騒いでも問題ないと判断したのか、セレナの鉄拳は鋭い。

この少しの間で理解した事がある。ハルクは馬鹿だ。今以外にも言わなくていいことを言葉にしてセレナに殴られている。そんなに殴らなくてもと感じるが、馬鹿な行動を積み重ねた結果、鉄拳制裁という形になったと思われる。セレナは初対面の俺に対してはとも優しいのだ。

「で、どうしたんだ？ハルク？」

「おう、聞きたい事があるんだけどいいか？」

あまり怒られているハルクも、怒る事で食事が進まないセレナも可哀想なので助け船を出す。俺は食事を終えているし、ハルクはさつき口に入れていたのが最後だったようだ。

「なんだ？」

「十夜つて馬鹿なのか？……くおっ」

突然の発言に思わず拳が出てしまった。そんな様子をセレナは納得顔で頷いている。それほど手が出る性格ではなかったが、それほどこの目の前のハルクほかに馬鹿扱いされたあの瞬間の苛立ちは表現できない。

「いきなり殴る事はないだろ！」

「いきなり馬鹿扱いしたお前が悪い」

食事を終えたのか、口元を拭きながらセレナが加勢してくれる。

「もうちょっと言葉を選びなさい。あなたの聞きたいこともわかるけど、直球すぎ」

しかしどうやら、ただ俺の援護をただけではなさそうだ。その言葉には含みがある。

「じゃあ、セレナが聞いてくれよ。俺はどう聞いたらいいのかわからん」

「そうね」

二人が聞きたい事が分かりあっているのだろう。そこには積み重ねた時間を感じる事が出来た。

「十夜。私達が聞きたい事はとりあえず一つよ」

そこにはハルクを弄っていた気配はない。ただ真剣に、こちらの真意を探ろうとする意志があった。

「あなた、興味本位で自殺するなんて何を考えているの？」

ケテルからある程度の事情は聞いているのだろう。セレナはその瞳に厳しさを宿している。

「七つの大罪の彼等も私にはあまり理解出来ない。自ら命を絶つなんて正気じゃないと思ってるから。だけどあの心を壊した感じと、狂気によって生きている状態はあなたよりもまだ理解できる気がするわ」

そう、本来自殺なんて壊れた人間がたどり着く最終地点だろう。周りに追いつめられて、追いつめられて。自分を追い込んで、追い込んで。どうしようもなく、どうしたらいいかも分からず、どうする事も出来ない人間が行う行為だ。

「彼らを正当化する事も、認める事も私には出来そうにないけど、糾弾する事も私には出来ないわ。ただ、あなたは違う」

その瞳はとても優しく、とても強く、とても厳しく十夜を見ていた。

第8章 慈愛（後書き）

本当はもっと続けたかったのですが、さすがに三千を超えたところでいったん切らして頂きました。次の話もこの続きからになります。と思います。

第8章 慈愛続き

「そりゃお前らなんかに糾弾されたらうっかり殺しちゃう」

突然割り込まれた声には、苛立ちの感情が含まれている。

「佐伯隊長ですか。どうしました？こんな時間に」

「そこにいる奴の暴走でしばらく訓練すら出来そうにないんでね。暇潰しに歩いてたらム力つく声が聞こえてきたのさ」

「あなたは第六部隊の隊長でしょう！もっと責任を持ってください」

基本的に水と油のようなセレナと龍は互いに相いれないように言葉を交わす。

「その隊長だつてお前らが勝手に決めたんだろうが。責任云々言いだすなら今すぐ辞退してやるぞ？俺はあの幽幻種がぶち殺せればそれだけでいいんだ」

「そんな無責任な！？」

「元々生きてる事に意味なんてない俺たちに、ムリヤリ殺戮本能植え付けたのはお前たちだろうが。それさえなけりゃもう死んでる」

十夜や龍を縛る狂気は全てにおいて優先される感情だった。幽幻種を全て滅しなれば、解放されることはないだろう。

「そうだな。迷惑な話だ」

いままで黙っていたが、龍の何の脚色のない言葉に肯定の意見を告げる。

「この狂気かんじやくさえなければ、俺だって自分の気持ちに素直に行動出来ている」

「それは、自ら生命いのちを絶つてことか？」

「そうだ。俺の好奇心は、その行為の先に在る」

自分のこの考えは、セレナやハルクだけでなく、同じ世界出身の龍達でさえ受け入れられない事だろう。その証拠に、ここにいる十夜以外はしかめっ面になっている。

「それがお前の狂気か……」

「それはどういう……」

カンカンカンカン

十夜の言葉をけたたましい鐘の音がさえぎる。

「話は後にしましょう。幽幻種が現れたようです」

「行くぞ、十夜！」

セレナとハルクの言葉に頷くと、それを確認した二人は駆け出す。その二人を追いかけながら、自らの内から滲み出る狂気を感じる。その十夜の顔は狂った笑みで飾られていた。その顔を確認して、唯

一動かない男はつぶやく。

「あんな嬉しそうにしゃがって。……羨ましいと感じてる俺も、十分狂ってるよな」

「こんな大所帯で攻めてくるなんて、久々だな」

目の前広がる三十体程の幽幻種の群れを見つめながら、ハルクの言葉を聞き流す。湧きあがる殺戮の本能は考える事を阻害する。今はただ、目の前に広がる存在を、殺したくて仕方がない。その本能が体を支配する。

「待ちなさい！」

後ろから制止の声上がる。どうやら幽幻種へと向かって駆け出しているようだ。しかし、こんなに殺したい存在が溢れているのだ。止まるなんて出来るはずがない。

「ハ……ク。……のサ……………」

「……………な。わ……………」

二人とかなり距離が離れたのだろう。その証拠に幽幻種の放つ魔素が体にまとわりつく。

「疾っ！」

左腕の凶器でまず一体の幽幻種を殴打する。その一撃で幽幻種の体は倒れ、動かなくなる。どこが急所なのか、どこを攻撃すればいいのかを、十夜の金色の瞳が教えてくれる。そして次の獲物へと視線を走らせる。獲物は十夜へとその牙を迫らせていた。

「危ない！」

白銀の換装衣のような鎧を纏う存在が、十夜と幽幻種の間に入り、その牙を手に持つ剣で受け止める。その鎧から聞こえる声は聞いた事のあるものだが、今の十夜には関係ない。

「うらあ！」

鎧の肩越しに、幽幻種に向け鎖を投げつける。そのまま鎖により頭を粉碎され動かなくなる。

「次だ！」

自分をかばってくれた存在を足蹴にして、宙へと体を投げ出す。そのまま次の獲物へと攻撃を仕掛ける。

「あいつ、無茶苦茶ね」

足蹴にされた鎧に駆け寄り、白銀の似たような存在。そこからはセレナの声が響く。

「やっぱり馬鹿なんだよ。もうちょっとずれてたらおれの首が吹き飛んでたぞ」

もう一人の鎧からはハルクの声。先程掠めた鎖からは、必殺の威力を感じていた。

「戦い方も、獣と変わらないわね」

セレナの視線の先には暴れまわる十夜の姿がある。回避や防御なんてまったく考えずに、次から次へとその左手の凶器をふるっている。的確に急所を突いているようでどんどん幽幻種の数を減らしているが、その身に刻まれる傷もさまざまいい事になっている。

「とにかく連携なんて無理ね。今後どうするかは後で考えるとして、とりあえずこいつらを滅するわよ」

「了解」

その言葉とともに、二人も幽幻種の群れに突っ込んでいく。彼らが戦場に現れてわずかな時間で、その場には幽幻種の死体が量産されることとなった。

第九章 発覚

「……ここは？」

目を覚ますと、そこはいつかも世話になった医務室のベッドの上だった。体中に包帯が巻かれている。

「目を覚ましましたか」

声のする方に目を向ければ、あきれた様子のリユーネの姿があった。

「気分はどうです？」

「体中が痛いです。でも頭はスッキリしてるかな」

十夜は自分の状態を確認しながらリユーネに笑顔で答えた。実際痛みが激しいのだが、気分はそれほど悪くなく、自然と顔が笑顔になる。

「もうちょっと自重して戦ってください。換装衣のない貴方は生身で戦っているようなものなんですから」

十夜の笑顔に毒気を抜かれたような声でリユーネが注意を促す。

「とりあえず軽い食事は用意してあるので、食べながら待ってください。セレナさん達を呼んできます」

部屋の奥からスープとパンの載ったお盆を持ってきて、十夜へと

渡し部屋から出ていく。その顔は十夜がいままで見た中で一番穏やかなものだった。

医務室の扉を出て、彼の様子を伝えるべく歩きだす。歩きながら、初めて見た十夜の笑顔を思い出す。

(びっくりしたあ。あの笑顔は反則よね)

自分の顔が熱くなっているを感じる。今まで無表情か、狂気の笑顔しか見た事のなかった十夜の純粋な笑顔は、リユーネに衝撃を与えるのに十分だった。

(笑えば結構可愛い顔してたな)

十夜が目覚めるまで、リユーネにはその青年が恐怖でしかなかった。出会った当初の何を考えているかわからない無表情。聞いてはいたが、初めて目の当たりにした他を圧倒するほどの狂気。自分の身をぼろぼろにしても戦い続け、止まらなかつたと聞いた時十夜という存在を理解することを諦めた。彼を治療するよう指示を受けた時半は本気で拒否したほどだ。

(でもあの優しいセレナさんを怒らすってどんな事をしたんだろう)

?)

十夜達が帰ってきたときの様子を思い出す。ハルクが傷ついた十夜を背負い、その隣には憤慨したセレナの姿があった。ハルクを叱るセレナの姿は何度も見た事があるが、あそこまで怒った様子は初めてだった。

(それにしてもひどい傷だったな)

十夜の傷はそのどれもが致命的だった。体中を走る裂傷や火傷。幽幻種の纏う魔素は人間の魔力を遮断する性質がある。その為幽幻種につけられた傷はどうしても自然治癒に任せるしかない。その為火傷だけは治癒魔法が効いたが、その他の裂傷は薬を塗り包帯を巻くなどしかできなかった。

「リユーネ？どうしました？」

そこにはすでに怒りの鎮まった様子のセレナがいた。考え事をしながら歩いていた為、気づかなかったようだ。

「セレナさん。彼の目が覚めました」

「そうですね」

リユーネの言葉に安心したような表情になるセレナ。

「傷の具合はどうです？」

「幽幻種につけられた傷は魔術が効かないのでまだですが、火傷はほぼ完ぺきに治癒出来てます」

穏やかだったのもつかの間、苦虫をかみつぶしたような表情になる。

「あの、もしかしてあの火傷は？」

魔素によって幽幻種につけられた傷は治癒魔術が効かない。そうなれば、治癒出来た火傷は何が原因かが気になった。

「リユーネの予想通りですよ」

ハルクは魔術を扱う事が出来ないので、状況的にあの火傷はセレナが負わせたということになる。

「あの……何故ですか？」

状況的にはセレナで間違いないと思うが、その理由がリユーネには全く分からなかった。

「そうですね。その話は彼の前でしましょうか」

そう言って、医務室の方へと歩き出す。

「具合はどうですか？」

扉が開くと、そこには二人の女性の姿があった。

「あ、全部食べたんですね」

リユースが食べ終えた食器を引いてくれる。

「はい。痛みはありますが体調が今までにないくらい調子いいんです」

「それはよかったです」

十夜の言葉に二人の女性は同じ言葉を返すが、その表情は真逆の反応を示す。赤みを帯びながらも笑顔のリユース。どうにもやりきれない感じでしかめっ面のセレナの姿がそこにはあった。

「どうかしましたか？」

「君は戦闘中の事を覚えているか？」

十夜の質問には答えず、質問を返すセレナ。

「いえ……実はあまりおぼえていません」

切迫したセレナの雰囲気を押され、質問の返事をする。

「なるほど、かなり危険な状態のようですね」

その声はこれから話す事の重要性を感じさせていた。

第10章 暴走

「ここはどこだろうな」

その呟きに、意味などない事は言った十夜自身が理解していた。

彼の傍らにはすでに物言わぬ骸となった大量の幽幻種。すべて急所への一撃で事切れている。

城を、国を飛び出し本能の赴くまま幽幻種を探して放浪する姿は、誰もが彼を狂人と判断するだろう。しかし、すでに彼にも自分がどういう人間だったのか、はたして人間であるのかさえ分からなくなっていた。ただ、幽幻種を前にして、その殺戮に身を任せれば、何も考えず、至福の時を迎える事が出来たので彼はさまよい続ける。

「次の獲物はどこかな」

語る口元は三日月のように開き、よだれを垂れ流す。意識の中では幽幻種を切り裂き、粉碎し、絞め殺している。それだけでも十夜はその笑いを隠す事が出来なくなっていた。

『貴方は壊れ始めています』

自分にそんな事を言ったあの人は誰だっただろう。そう言われ、いつたい何日が立ったのかすらわからない。

十夜がアスタール城を離れて二週間が経っていた。

「落ち着いて聞いてください。十夜、貴方は壊れ始めています」

セレナは一言一言をはっきりわかるように発音した。それ故に聞き間違いという事はないだろう。

「セレナさん？何を言っているんですか？」

セレナの言葉に先に反応したのは十夜ではなくリユーネだった。その顔には困惑の色が見て取れる。

「この間の戦闘の事を話しましょう」

セレナは十夜とリユーネの様子を気にすることなく話し始める。

「あの時の君は、幽幻種に遭遇する前からその狂気を見せ始めていた。普通の換装衣を纏う者たちなら幽幻種を前にして初めてその狂^{かん}気を爆発させるのだが、君はただ幽幻種の元に向かっているそれだけで狂い始めていたんだ」

その時の事はまだ覚えている。確かにこれから幽幻種を殺せると気分が高揚していたのを思い出す。

「そしていざ幽幻種を前にした時、その理性は完全になくなっていた。そこにいたのは血に飢えたただの獣。私達が援護に入ろうとも、幽幻種が足を止めた瞬間私達もろとも攻撃してきました」

そこら辺から記憶が曖昧になってくる。ただ、まだ記憶の底にそんな事をした自分がいた事を微かに思いだせる。

「決定的な変化が訪れたのは幽幻種の数が残り半分になるうとした時です。今までは狂気に彩られていても、その行動はまだ人間的でした。先程は比喻で血に飢えた獣と言いましたが、それすらも生ぬるく感じる変化です。ある一瞬を境にそこにいたのは本当に獣のよきな行動をとる貴方の姿でした」

セレナの語る自分は記憶の中にはまったく残っていない。しかし、それを嘘とも思えない自分がそこにはいた。

「四足で疾駆し、左に備わる狂気で幽幻種を蹂躪し、その顎で息絶えた幽幻種を食い漁る貴方は、とても今の貴方からは想像できない」
幽幻種を食い漁ったと聞かされた時、自分の口の中に艶めかしい血の味が蘇る。その時の記憶はないが、幽幻種を食い漁るという行為がとても魅力的なように感じられる。

「その後、目に映る全ての幽幻種を全滅させたあなたは次の獲物に私達を選びました」

その時忘れていた記憶の蓋が、音を立てて壊れるのを感じた。

目の前に広がる幽幻種の骸の群れ。しかし、内に宿る狂気が満足することはない。もっと、もっと、もっと！

視線をずらせばそこには白銀の鎧を纏う騎士の姿が目映る。しかも強力な力を感じる上質な餌のようだ。自分が特に考える事もな

く、本能に任せるままに襲いかかったという事実が十夜に突き付けられる。

「その後の説明はいい！」

「……………どうやら思い出したようですね」

声を荒げる十夜に、対して驚きを見せることなく、セレナは淡々としている。

記憶の最後は、業火に身を焼かれたところで終わっている。片方の白銀の騎士と戦っている間に、もう片方の騎士から受けた魔術だと今なら分かる。

傍に同席するリユーネも、十夜に魔術を放ったのがセレナと分かっていたので、今の説明で自分の知りたかった理由を知ることが出来た。

「あなたは危険です」

淡々としたセレナに何か強い意志を感じる。

「これまでに三度、狂気に呑まれたあなたは、我々の国でも最重要危険人物と判断されました。」

強い光に包まれた彼女は、その身に白銀の鎧を纏う。

「ケテルの命により、貴方を拘束します」

第11章 脱走

「そつちにいたか!？」

「いや、いない。もつと奥まで行ってみよう」

鬱蒼と茂る森の中、降りしきる雨が体中を洗い流してくれるようで気持ちいい。そんな森の中で誰かを探している男達の声が聞こえる。

まず間違いなくあの男達は自分を探していると、十夜は確信を持っていた。しかし、その男達から逃げる事も、撃退する事も、見つかってやる事さえできそうにない。体中の傷が、十夜に隠れる以外の選択肢を選ばせなかった。本人としては隠れているという意識されない。ただその場に倒れているだけだ。

森の中、しかも雨という現象がなければ、動く事の出来ない十夜は発見され捕縛されていただろう。いや、いつそ動けないほどに傷ついていることが不運といえた。少しでも動く事が出来たのなら自分を探索する者たちに這ってでも姿を現したという確信がある。

「どつしたものが」

そう言葉にしながらも、体が言う事を聞かない。本来ならば自分は内なる狂気に支配され、永遠と殺戮を繰り返していただろう。しかし、今や十夜の意識と本能は完全に別離していた。ただひたすらに自分を殺してその先に何があるのかを知りたい好奇心。ただひたすらに獲物を殺戮したいという狂気。その二つはより自分を危険な地へと導く事に関してだけ共通の認識を持っている。

傷ついた今でなければ、こんなにゆっくり思考を続けることはできなかつたことが嫌でも理解される。どれだけ考えて行動しようとしても、それが体を動かす事がないのを何度も確認したからだ。今現在、十夜は十夜であつて十夜ではない。その根底にあるのは十夜という意志ではなく、狂気の本能が体の主導権を握っている。その狂気が何度も十夜の意識をかき消し、それに抵抗すらできなかつたことを思い出せば、どちらにこの身体的所有権があるのかわかるだろう。

「どうしたものか」

それでも思考を止めるわけにはいかない。考える事を止めれば、それは即刻十夜の意識的な死を意味する。意識の中の十夜にとつて、死とは望むものではあるが、体が生きている限り、ソレは望む死のカチチではない。完全なる死の先に何かがあるのか。それこそが十夜の知的好奇心を刺激するものだ。

本能が自らを、より危険な場所に運んでその身を八つ裂きにされるまで、十夜の意識は死ぬわけにはいかなかつた。

「ここに入っている」

拘束され、身動きできないよう手枷と足枷をされ、更に壁に固定された鎖の先にある首輪をつけられる。どれだけ嚴重に拘束するんだと思つたが、更に目隠しをされた時には、自分がどれだけ危険人物として扱われているかを理解した。

そのままここへ連れてきた兵士が牢に鍵をかけ、離れていく音がする。

感覚的に一時間ほど経つたが何も変わらない。その後二時間、三時間ぐらいは変化がなく、ただ身動きが取れず、視界が封じられた時間が流れていく。

……………時間はただ過ぎゆく。

そのままの状態で丸一日経っていた。すでに十夜にはその時間の経過を認識することが出来なくなっていた。どれだけの時間この状態かが分からない。十夜の中ではこの拘束された時間は何年にも、数時間にも感じられる。たかが一日されど一日の時間が経過していた。身動きできず、何も見えず、食事はおろか水分の補給すらなく、生理的なものは垂れるに任せている。その時間は十夜という存在が憔悴するのに十分だった。

（何故、俺はこんな扱いを受けている？ただ自分の好奇心を満たそうとしただけじゃないか）

理不尽なこの状況が、十夜に新たな意識を芽生えさせた。

(憎い、憎い、憎い、憎い。俺にこんな扱いをする奴。自分と呼んだこの世界。私を呼ぶ原因となった幽幻種。僕がこんな場所にいるのに悠々と外で生活している生き物)

元から備わっていた狂気が、十夜の憎しみを加速させる。

.....時間は過ぎていく。

表面的にはそこまで変化が見られない十夜。ただ静かにそこに拘束されている。拘束されて三日が経過していた。すでに体は脱水症状や栄養失調により万全とは言い難い状況だ。生理的な糞尿もすでに乾ききり、新たなモノを体は生み出さない。何も口にしていないのだから当然と言えば、当然の事だ。

この時にはすでに十夜は完全に壊れていた。

タンタンタン

ここに拘束されて久しぶりの音が聞こえる。その足音はどんどん近付いてきて、牢を開錠する音がし、さらに自分に足音は近づく。

気付いた時には目隠しを外され、久しぶりに拓けた視界の中には見た事もない女性がいた。

「こんなに痩せて.....食料を持ってきました。今手枷をはずしくひゅっ」

十夜の手枷を外そうと鍵を差し込んだところで、彼女は話す事が出来なくなつた。

女性の喉に咬みつき喰い破っている十夜の姿がそこにはあった。そのまま嘔き出る血を音を立てて飲み干す。

すでに壊れてしまった十夜に自分を助けに来た存在など判別できなかった。目の前に生き物がいたから殺した。それだけだ。しかも十夜の瞳は生き物の急所を正確に診せる。

手枷に差し込まれた鍵を口を使って開錠し、そのまま自由になった左手を揮い足枷と首輪から伸びる鎖を破壊する。その左手には、手首と一体化した十夜の狂気が顕在されたままだ。自由になるのはそれほど難しい事ではなかった。

狂った獣は、ここに解放された……………

第12章 口論

「いたぞ！捕まえる！」

声が響くと獣へ向けてそれぞれ武器を構えた五人程の兵士が獣の前に立つ。その内二人の兵士が獣へ向けて自らの武器を獣へ向けて振るった。

「なっ……」

「じっ……」

先頭にいた兵士の頭を左手の凶器で殴りつける。その衝撃は兵士の首から上を一撃で引きちぎり、そのまま鎖を放つ事ですぐ後ろにいた兵士の心臓を正確に貫いた。二つの人間は血を噴水のように垂れ流しながらその活動を停止させられる。その血は獣を真っ赤に染め上げる。

「ひっ！」

目の前で繰り広げられた惨劇に一瞬息を飲む兵士。自分に与えられた使命を守ろうとする責任感と、本能的な恐怖がせめぎ合い硬直する兵士。その様子を見逃すことなく、獣はその喉元に勢いよく左手を咬みつかせる。

「ひゅっ……」

言葉にならない空気が抜けるような音が兵士の口からこぼれる。そのまま喉を握りつぶす事で、もう一つ遺体が出来あがる。その手

に持骸に興味を失った獣は、後ろに遺体を投げ捨てる。その姿は遊び飽きたおもちゃを投げ捨てる子供のようだ。子供のような無邪気さは、時として残酷に目に映る。誰でも遊びの延長で、もしくは邪魔なものを退ける様に虫を殺した事があるはずだ。ヒトの姿をした獣には、人間を殺すことはその虫を殺すことと大差ない。

「う、うわぁ！」

「助けて！」

一瞬で仲間を殺された二人の兵士は、惨劇を前にし完全に戦意を喪失していた。あるのはただ恐怖のみ。わずかばかりの抵抗の意志さえ、その獣の前に立つとかき消えてしまう。それほどまでに獣から感じる狂気は圧倒的だった。

「ひゃはっ」

しかし、兵士が抵抗しようがしまいが、獣が獲物を逃がすことはない。獣のより近くに立っていた兵士に、愉悦の声をしながら襲いかかる。

左手を振りかぶり、兵士の頭から振り下ろす。その行動に何の抵抗も出来ぬまま、兵士の頭蓋骨は完全に割られ、新たな物言わぬ骸が出来あがった。

「あ、ああ、……」

とうとう最後の一人となった兵士は恐怖で腰が抜け、股間からの尿を抑えられなくなっていた。その姿に獣は楽しそうに笑う。

「あはは」

抵抗はおろか、最早逃げる事も出来なくなった兵士の四肢へ、左手の鎖を伸ばし巻きつける。そのまま左腕を上にあげれば、四肢を鎖で縛りあげられた兵士の体が宙に浮き、獣の上空に移動させられる。

「……死ね」

最後にそう告げると兵士の四肢は引きちぎられ、五つに分かれた人間の残骸が転がる。その中心にいる獣には血の雨が降り注ぐ。あたりは幾つもの原形を留められていない死体が転がり、異臭がこもる。その結果に満足そうにして、獣……十夜は歩き出した。後には比喩ではなく血の池が残される。

「藤島十夜……城外へ逃走し、その行方をロストしました」

「そっか。ご苦労さん」

第六部隊隊長・佐伯龍の言葉に龍の部下であろう隊員はその場を後にした。残された龍の手には、今回の被害を記した書類がある。

「死者六十七人、重傷者二人……か。この二人は本当に運が良かったんだろうな」

書類に目を通して龍は呟く。そんな龍に近づく者がいた。

「もう少しで死ぬところだった者に対してその言葉は何だ！」

龍の背後から怒りに満ちた声が響く。そこにはセレナの姿があった。龍を睨み、その表情は憤怒に彩られている。

「……思った事を口にしたただけだ。あの狂気を前にして死ななかった。それを幸運と言わずなんだというんだ？」

そんなセレナの怒りを歯牙にもかけずに言葉を返す。龍の発したその内容に、セレナは苦虫を噛み潰した表情になる。気持ちでは納得できないが、龍の言葉を理解できるセレナは返す言葉が見つからない。

「そんなことより……これから十夜をどうするつもりなんだ？」

そんなセレナを無視して龍は言葉を続けた。元々彼女の気持ち程度にそれほど興味は持っていない。龍の中で今一番気になっている事を口にした。

「討伐隊を組む。徹底的に国内を探索し、抹殺せよとの命令が下った。お前達七つの大罪、第六部隊もこの討伐隊に組み込まれる」

龍の質問に、報告する内容も含まれていたセレナはそれと合わせて伝える。セレナの言に、龍は嘲笑を浮かべる。

「俺達に同郷の仲間を討て、と？」

その言葉にセレナの表情は怒りで真っ赤に染まった。

「あのように狂った者を仲間だと！？あいつは何十人も兵を殺害しているんだぞ。その中にはこの世界でお前達の世話をした者だつて含まれている。それなのにあの狂気に堕ちた獣を仲間だと言ったのか!？」

龍の言葉はセレナの逆鱗に触れたようだ。仲間を殺された彼女には、それだけ許せない事だったのだろう。しかし、

「それはお前らのせいだろ？」

冷たい、冷酷とも言える視線を向けて龍は告げる。

「確かにあいつは元々壊れかけてた。だけどその身に宿した狂気も、完全に壊れてしまったのもお前達の責任だろうが！」

「……………しかし、……………」

「この世界にあいつを呼んだのは誰だ！？あいつに狂気を宿させたのは誰だ！？あいつを監禁し、その心を壊したのは誰だ！？答える！」

「わたし、達だ……………」

龍の怒りの言葉は終わらない。

「そのお前らが正義面して討伐だと！？寝言は寝てから言え！まず

は自分たちのしたことを考えてみる！」

龍の一喝にセレナは言葉を失う。

その様を見て、龍は興味を失くしたようにセレナから視線をはずした。

「探索には協力してやる。だが、あくまでそれは同郷の仲間を探索することだけだ。俺は十夜をこの目で見て、どうするかを自分で決める」

「項垂れるセレナを残してその場を立ち去る。その歩みを止めることはセレナには出来なかった。」

第13章 導き

「ん、」

静かな部屋の中で、寝言とも寝息ともとれる音が聞こえる。室内の調度品はベッド、机と椅子、それにクローゼットがある程度の簡素なものだ。その部屋の片隅にあるベッドの上に先程の音を発した青年が寝ていた。

男性にしては細い印象を受ける肢体に所々包帯を巻きつけて、十夜は眠っていた。

「んん、」

先程から漏れる吐息は覚醒が近い事を示す。やや女性的な顔の双眸がゆっくりと開かれた。

「……どこだ？」

やや寝ぼけた顔を晒して、見た事のない景色に言葉を発する。特に考えずに思った事をただ口にしたような感じだ。そこに十夜の意志の色は薄い。

「?……!?!?」

ゆっくりと自分が意識を失う前の事を考え、思い出していると自分の記憶に心臓が跳ねる。

急いで自分の手首や足首を観察して、拘束されていない事を確か

める。

「痛つつ」

激しく体を動かした事で、傷が痛んだのか十夜は顔をしかめた。しかし、そのことで包帯が巻かれ治療されている事実にも再度疑問を感じる。と、そんな時

「起きたみたいね」

部屋の扉を開けて女性が現れた。

瞳には落ち着いた輝きを持つ優しいげな雰囲気を持つ女性。年の頃は二十歳を少し超えた感じで十夜よりは年上の印象を持つ。その手に湯気の上がるスープをのせたお盆を持ち、ゆっくりと十夜のそばまで歩いてきた。

「物音が聞こえて起きた様子だったからスープを持って来たわ。食べられる？」

「ああ。だけどその前に……」

「食べられるなら話は食べた後。二日間も寝てたんだからお腹すいてるでしょ？」

優しい言葉に十夜のお腹が反応する。空腹を訴えるお腹から響く音に、女性は微笑みを浮かべる。

「体は正直ね。」

「どつぞ」

手に持っていたお盆を十夜に差し出す。受け取ったお盆の上のス
ープからは食欲を掻き立てる優しい匂いが鼻孔をくすぐる。

「いただきます」

自分の食欲にもはや抵抗する気もない十夜はスープを口に運んだ。

「うまいー！」

その言葉を最後に黙々とスープを口に運ぶ作業を繰り返す。その
姿を女性はベッドの傍らに置いてあった椅子に座り、嬉しそうに眺
めていた。

「ごちそうさま」

「お粗末さまです。こんなに美味しそうに食べてもらえたら作った
甲斐があるわね」

そこにはゆっくりとした時間が流れていた。

「じゃあ空いた食器をちょうだい。話は戻って来てからね」

十夜からお盆を受け取って女性が部屋を後にする。

「それじゃあまず自己紹介でもしましょうか」

女性が部屋に帰って来ると、傍らの椅子に座りそう話しかけた。

「まずは私から。名前はクリスティア・ニーズ。呼び方はクリスでいいわ。さんもいらぬ。この村で用心棒みたいな事をしながら生活してるの」

「用心棒？」

目の前の女性　クリスの言葉に疑問を返す。

「最近幽幻種が頻繁に出現するようになってちやっただからね。私みたいな仕事も珍しくないわ。私には魔法の力があるし」

言いながら掌上の上に火の玉を作る。クリスの見た目から用心棒なんて想像も出来なかつた十夜だが、魔法を目撃した事で信用する。

「それじゃあ次は君ね。なんであんな森の中で傷だらけで倒れてたのか。それも言える範囲でいいから教えて」

真摯な瞳で十夜に告げる。思えば傷だらけで倒れているなんて不審者以外の何物でもない。そんな男を家まで運び治療まで施したクリスの言葉に、十夜も真摯な気持ちで言葉を口にした。

「藤島十夜。呼び方は十夜で構いません。俺は……異世界からこの世界に呼ばれました」

「……続けて」

十夜の言葉に驚いた顔をしたクリスだが、特に口ははさまず続きを促した。

「この世界に呼ばれたのは俺以外にも何人もいるみたいでした。そ

してその呼ばれた者はみんなある力を持っていました。俺以外のみんなは……」

言葉を発しているとその時の事が思い出される。十夜もこの世界に来てからの事を話すうちにその時の情景が頭に浮かんでいた。

「俺に与えられたのはこの左手にあるモノと、内に宿る狂気だけで皆が持つ換装衣はありません。ただ、その狂気は特に強いみたいで俺は危険視されました。その結果拘束され、自由を奪われました」

思い出すだけで自分の内から殺気立つてくるのが分かる。その感情を必死に抑え込みながら十夜は話を続ける。

「何日も食事を与えられず拘束されていたので、俺は殺される予定だったでしょう。そんな俺を助けに来た存在がいました」

その時の事を冷静になって思い出せば、心が締め付けられる。

「ただ、俺はその時狂気に吞まれていました。壊れていました……助けに来てくれたのが男なのか女なのか、若かったのか年老いていたのか思い出すことはできません。俺はその助けに来てくれた存在をこの手で殺しました」

十夜はクリスに隠し事をするつもりはなかった。助けくれただけでも感謝の念はつきない。そんなクリスには自分を偽ることはできないと思え、真摯にこちらを見つめる瞳には嘘など通用しないのではないかと思わせる力があつた。

「そのまま俺は拘束から解き放たれ、自分の狂気を抑えることはできませんでした。目につく存在を片っ端からこの手にかけ、その場

から逃げ出して森に入りました。そのまま獣のように何日か生活していたのですが、段々と気分が落ち着くにつれて自分の危険性を実感しました」

この時には十夜の瞳からの光は弱弱しくなっていた。黒と金の双眸は昏い光を放つ。

「俺のような危険な存在を拘束していた者達が自由にするはずもなく、何度も追手に狙われて、傷つき、意識を保てなくなったところで俺の記憶は終わりです。その後クリスにここに運んでもらえ、今がある」

「そ、わかった。じゃあ十夜、起きたばかりだったし疲れたでしょ？今日はもう遅いしゆっくりに寝てね」

「え？」

クリスの言葉に十夜は反応できない。しかし、クリスは十夜からの返事も待たず立ち上がり、部屋を後にする。ここから追い出される事を覚悟して話していた十夜は今の状況が理解出来ない。

「仲間を呼びに行ったのかな？」

自分の中でクリスの事を想像する。危険な存在である十夜を確実に仕留める為に仲間を呼びに行った。そう考え何時間か過ぎたが大した変化もない。

「寝よ…」

何時間もクリスの行動を考えていたが答えが出る事もなく、頭も

つかれたので眠りにつくことにした十夜。

眠った後も、彼を襲う脅威は訪れない。静かな夜は過ぎていった。

第14章 理解(前書き)

ここまで書いてきた内容を今月末にでもしっかり読み返して脱字や文章構成でおかしなところを直したいと思います。

第14章 理解

「おはよ。朝だよ、十夜」

部屋の窓からは、明るい光が差し込んでいる。その光の中十夜が目を開ければ、クリスが笑顔でこちらを向いていた。

「おはようございます」

まだ寝ぼけた頭で挨拶を返す。その日常的な出来事が、今の自分には不似合いだと思いつつもそれを嬉しく感じる。ここ数日というよりも、この世界に来てから初めてともいえる穏やかな時間の流れ。

クリスは笑顔で十夜に話しかけた。

「体調はもう大丈夫？」

「はい。問題ありません」

自分を気遣う言葉に、十夜は素直に答えた。体の痛みもなく、怪我也も完治している。倒れる前の状態が嘘のように、十夜の体は絶好調だった。

「それならよかった。じゃあこれから朝食にしよう」

そういつて部屋から出て行った。十夜も拒否する理由もないので、体を一度伸ばし同じく部屋を後にした。

「今日は一緒に来てほしい所があるんだけどいい？」

朝食を食べながらクリスが十夜に問う。

「わかりました」

用意された朝食　トーストとサラダ、それにスープが用意されていた　を先に食べ終えていた十夜は、クリスの言葉に了承を伝える。

「よかった。目を覚ましたら連れて来いって村長に言われてたんだ」
そう言ってほほ笑むクリス。そのクリスを見て自然と十夜も笑顔になる。

「クリスは俺にとって命の恩人だ。俺に出来る事は何でもするから気にせずと言ってくれ」

「そんな固く考えなくていいよ。困った時はお互いさまだし」

そういつて最後のパンの欠片を食べきる。

「とりあえず出かける前に君の服をどうにかしないとね。村の人が

ら男物の服を借りてるからそれに着替えて」

クリスの見る方向には確かに洋服が置いてあった。ぼろぼろだった十夜は、元々来ていた服も服とは呼べる状態ではなかった。今は簡単なジャージのようなものを着せられている。昨日起きた時にはすでにこの格好だった。

「わかった。それじゃあ着替えてくる」

「うん。私も着替えるから準備ができたら出発ね」

その言葉を合図に二人はそれぞれの部屋へ動き出した。

「お待たせ。やっぱり男の人は準備が早いね」

十夜が先程朝食を食べていた席で待っていると、奥の部屋からクリスが出てくる。その姿は簡易ながらも鎧を身に纏い、戦闘に身を置く者の風格を醸し出していた。

「じゃ、行こっか」

その言葉に頷き、クリスについて玄関から外に出る。そこではじめて十夜はこの村を見た。

のどかな雰囲気で、見渡せば畑や田んぼ、果樹園などが目に映る。そこには働いている村人もいて、みんな楽しそうに生き生きとしていた。

「いい村だな」

自然と十夜の口からそんな言葉が出ていた。それは思わず漏れたと言った感じの小さな声だったが、クリスにはしっかりと届いていたようでとても嬉しそうだ。

「ありがと。何にもないけど私もこの村好きなんだ。だからこの村の為に戦えるし、この村を守りたいと思える。この村が生き生きとしていることが私の誇り」

そう語るクリスはとても輝いていて、思わず十夜は見惚れてしまう。しばらく見つめてみるとそれに気付き慌てて視線を外したが、顔が上気してしまっている。それをごまかすように、

「ホントにいいところだなあ」

と、クリスとは違う方向に顔を向けていた。

そんなほのぼのとした時間が流れながら移動していると、目的地にたどり着く。歩きながら見ていたそこらにある数多くの家よりも大きくしっかりとした造りの家が目の前にある。

「ここが村長の家よ。準備は良い？」

クリスは十夜に問いかけ、頷いたのをみて扉にある呼び鈴を鳴ら

した。数秒待てば、中から扉を開ける音がして五、六歳ほどの少女が現れる。

「おはよう、シンシア。ボアさんはいるかな？」

「おはようございます、クリスさん。父ならいますのであがってください」

クリスの問いに、シンシアと呼ばれた少女はしっかりとした対応で二人を中に招く。そのまま応接室のようなところに通され、少し待つように言われたので二人はソファに腰掛けて待っていた。

数分の間緊張して待っていると、この応接室の扉が開き優しい朗らかな老人が現れた。この者が村長なのだろう。優しさの中にしっかりとした威厳も感じる。

「よく来た、クリス。…この者がそうなのか？」

村長がクリス、十夜の順に視線を動かし問う。

「はい。彼が森の中で保護した青年です。昨日目を覚まし、動ける状態でしたので連れてきました」

問われたクリスはしっかりと答える。その答えを聞き、視線を十夜に固定させて村長は十夜に話しかける。

「私はこの村の代表のボア・ガステインです。さきほど案内したのは孫娘のシンシア。よければ貴方の事を伺いたい」

しっかりとこちらを見て話す村長の目をしっかりとらえながら

十夜も言葉を返す。

「名前は藤島十夜です。クリスさんには昨日お話ししましたが、異世界からやってきました」

十夜の言葉にゆっくりと頷き返すボア。

「あなたからは濃い魔素の気配がします。話には聞いていましたが、貴方が異世界からの来訪者というのを疑うつもりはありません。それに、数日前貴方を探す国の兵士達がこの村にもやってきました。その後現れた貴方は、その時兵士が言っていた風貌と重なる」

ここにも追手がやって来ていたという衝撃の事実には十夜は目を見張る。しかし、その十夜の様子を気づいていない風にボアは話を続ける。

「闇のような漆黒の髪、黒と金のオッドアイ。年の頃は二十歳前後で、男性にしてはやや細い体格の男。左手には鎖の巻きついた小手を装備している。兵士は指名手配された男の風貌をそう語っていました」

「それは間違いなく俺ですね」

ボアの語る男の特徴に、苦笑気味に十夜は答える。

「見た目だけならそうですね」

しかし、ボアの言葉はまだ終わりではない。

「兵士はこうも言っていました。その者は異世界から喚びだした人

間で狂気という言葉が表現した存在らしく、会話などが成り立つ相手ではないそうです。目の前の生きている存在を片っ端から殺してしまう危険な男だと聞いています」

「……やはり俺の事ですね」

今度はさすがに表情を曇らせ、ゆっくりと十夜は答えた。

「内に宿した狂気が表に現れたら、それを抑える術を俺は持っていません」

自ら危険な存在である事を告げる。

「ふむ。それはいつ出てくるんですか？」

ボアは言葉を重ねる。

「今の貴方を私は狂気の存在だと思えません。ただおそろしく悲しい瞳をした青年にしか見えないんです。しかし、貴方は自分で自分を危険な存在だという。その意味を私は知りたい」

「貴方もクリスも不思議な人達ですね。俺ならこんな危険な存在早く消えてほしいと思ってしまっ」

再度苦笑気味に十夜は語る。

「俺が知る自分の事は全て貴方に伝えましょう。その上で俺をどう処分するか決めてください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1838t/>

終わりから始まるエデン

2011年6月17日01時15分発行